

二〇一六年一月二十九日

強風に眉根ゆがませ武者絵
細枝に数珠なす春の雨雫
大いなる量を纏ひて月冴ゆる
昇り龍さながらに舞ふ群千鳥
朝風呂や外の雨音は早春譜

二〇一六年一月二十八日

二歩三歩して凍鶴となりにつり
春光や水底に射す日の碧
墨絵めく山河となりて時雨けり
寒風をつく円陣の気合かな
鴨真似て尻振りあるく幼どち
抽んでしペンシルチャペル春日燦

二〇一六年一月二十七日

炉を囲むほうとうに味噌溶き入れて
除雪車が来る地響きを先駆けに
柄杓もて割る御手洗の薄氷
墜落に骨折れし尻担ぎゆく
眼の手術終へて安堵の根深汁

二〇一六年一月二十六日

大玻璃に雪舞ひやまず宿籠
腰痛と言ふてはをれず雪下す

なつき

よう子

智恵子

よし女

せいじ

ともえ

とううち

智恵子

なつき

明日香

せいじ

とううち

花茗荷

ぼんこ

なつき

ぼんこ

ひかり

花茗荷

北風が頬骨を刺す朝かな

奈落へと咲き継ぐ峡の水仙花

寒晴れの水琴窟の音高かし

二〇一六年一月二十五日

風の息見据ゑて風の糸引けり
春の空白磁の雲を浮かべけり
無音界とは斯くあらん雪の朝

二〇一六年一月二十四日

竹爆ぜるたびに喚声どんと燃ゆ
雪予報外れ安堵とがつかりと
夢描く子らの絵風の蒼天へ
神泉に彩鯉群れて春隣
中天に満ちてしろがね寒の月
ガソリンの補給手間取る悴む手

二〇一六年一月二十三日

酒樽のピラミッドなす初恵比須
つくばいに薄氷残る日暮れかな
海坂へなだれなだれて水仙峡
海風に育てられたる野水仙

とううち

ひかり

満天

なつき

豆狸

三刀

さつき

明日香

なつき

豆狸

菜々

せいじ

さつき

智恵子

菜々

三刀

毎日句会みのる選・二〇一六年一月三二日